

70

65

60

55

50



文庫6
944

京都 近松門左衛門著
大坂 八丈舎自笑訂
江都 振鷺亭主人譯

しろは醉故傳 全

丁子
南總館梓

此書ハ魏晉唐宋元明ノ小説ヲ採り源氏物語ノスジヲ
交ヘテ世話狂言ニ和ラナ白猿ノ荒更路考ガ若女形
訥方和實杉曉色悪其外若般大勢ナソラテ趣向トス
誠紙上三劇場アツテ筆下声色アル如シ

南總館

梓

福田文庫

しろは醉故傳序
謝道人曰ク子房一名落情孽只有兩條
生路一曰遂其欲爲之念二曰激其
欲爲而不能卽遂之念遂其欲爲之
念則此外弁無他想精神才力反有
著落功名事業反有根據矣云云我
父祖自笑嘗續近松氏之志其所著
雖出遊戲凡主鑒戒今也振鷺先生

降卓絕之才以_テ外俗情之趣頃劇本
雖充棟汗牛豈亦有如_下此賞_{スル}奇者歟
噫先生江左風流士彼欲爲_キ而不能
卽遂_ル者則必思_レ有_ニ以遂_ル之矣庶幾念
其念易賢云斯編蘊奧用_ハ放情之激
法則先生大意盡是

寛政甲寅春正月

攝陽

八文舎自笑題



自叙
施耐庵_が水滸傳_ひ由良巖乃
空醉_う妓_ひ醉_ま故傳_{ゆきく}
さう禮_{れい}虚_う中_{ちゆう}實_{じつ}金部未_ま
遂_す益_{ます}郭氏韓壽_{かんじゅ}二減_{さんげん}
所謂我朝乃招_{まん}長_{ちよ}也
是_れナリ女_{めの}也不_ふ棄_き士_し二其_に行_ゆ也

教乃詩を國子より和らけ且
阻春白雪を以て世俗よ隠さま
く歌と柳西施羅山乃賣薪の
娘高雄蓑輪の芋賣の娘とうや
嘻目鼻まくら如何なり道具
哉や小町う面と硝子屋乃
あふてもなまく累う面とて出来合
屁腰の眞あるをあそびかくびり乃
物好なり潘安人が好男張孟陽
醜男古鉄沽よ見せバ直段乃るト
いん彼洛神乃雪女巫山の雲女
是化物なり婦人鄭而紅粉を

剥バ正ヨコモ蜜瓜^{ヘチモ}珍^スは天性
鄭國^{テイク}の女^{ナメ}アリベ何^{ナシ}怜^{ラブ}
我^{コガ}日本^{ナカニ}越^{タチ}後^{アフタ}の女^{ナメ}如^ジく味噌^{ミソ}に
變^{ハシム}トテ王乃輿^{ウノヒ}となリも^ハアリ
歎^{ハシム}キ也^{ハシム}美人終^{ハシム}よお花荒神松^{ハシム}
糊賣^{ハシム}老婆^{ハシム}と^{ハシム}ん事^{ハシム}を嘻^{ハシム}卓王孫^{ハシム}
娘^{ハシム}淨^{ハシム}昌利^{ハシム}の声^{ハシム}よ慕^{ハシム}て司馬相如^{ハシム}
許^{ハシム}よかのこ^{ハシム}宋玉^{ハシム}在中^{ハシム}將女熊艷^{ハシム}
冶郎淫氣^{ハシム}をの^{ハシム}摸範^{ハシム}と^{ハシム}戒^{ハシム}む
龜^{ハシム}ノ如斯^{ハシム}人^{ハシム}

振鷺亭主人醉中誌



一代の譜と已が美貌より起る浮華放蕩遂よ
云頼従となりて
羽二重乃唐
革羽織と

な

岩永宋治郎



惜べく如斯才子美貌よりよひを捨てうや
置忘るや是さるふゆりぬ

藝者ああよく

姫君
おちづく
の方旋女

鳴波とある柳弁天の化身ありを
悪龍の変生なりを貞女といはん
淫女とやうん面の媚あると公の大膳と
魄ありナリナチテナンキツン



異服用左衛門



家老の重任館の騒動を見て家の危を樹へ
忠臣なるに終臣あれば智者みて
学者論語よりこの悔やあればのを。

俱俚迦羅龍紋九郎



人の為よ我身を
擲ハ義なり哉此者侠氣
名の通ひ商業とて損友機勢れ
錢金の恣み一誠よ男一足あく代大も努めり
此競の志を正道よ強きば足血氣の勇あべ

ろ和尚深太郎

足と
太平樂の

肝民あらん

難奸惡童剛を傷め弱を
助く強敵をなす二三人の店をお壊す。

道公者よひ法施



孫勝法印

減通のト考
奇怪乃神翁
孤を使ふよあび術の得一
うごくはひゆう十二相



いろは醉故傳同錄

第一回

呉服用太夫が智ち第六天魔王まくわうを先らを

第二回

俱哩迦羅龍紋九郎橋くりからりゆうもんの上うへ涼すずむ

第三回

ろ和尚らが達様たつようよ尺角しゃくかくの懶けな枕まくらを抜ぬく

第四回

ろ和尚らが大おほき木き雪せつの大おほ竹林ちくりんを騒さわうモ

第五回

深太郎ふかたろう大おほき酒さけふ醉ゑて仁王じんのう嘔う氣きを出だす

第六回

宋次郎そうじらう大おほき雪せつの夜野よの中なか古いそ社しゃ

第七回

藝者げいしゃおもゆおもゆの岡おかの山やま越こして狼おおかみを打うちる

第八回

王子婆甲列街道とて肉饅頭を賣

第五回

孫勝法印大峯山上とて幻術を使ふ

右以上九篇

振鷺亭主人戯作

教訓いは醉故傳

呉服用太夫智第六天魔王走らせ

達のむしに通鑑繫案の時代柳家推舉より檀弓も
うる永泰齋のまほらと云ひて爲めとやへ
生れ死もちうなる歎嘆りゆりが天然の福とて嘘表あらず
の方、二十相をあこじ今小町とては密儀坂東の安、み殊古巻
明と十種書奇かく琴ノ尺、絃多たむびむむて頬々奇巻よ
かよせあひてのゆにこ貞姫のなほあり十六の春ひゑん
御してほま姫の瞳どう何つひまくまきやあおも奉うの方所持

病のはあすはすくもじよもひのまへ難かずす度もと医療はま
みせを盡せたす發あくもむかくにせりわたり薬家老矣被
用なやむるを孫精法下くや人相ト筆のりてほき傷病が持
つまを痛がだのぶれあはよあればいそぎゆすす有て然づばくを
あらぬまこと生神と医加の孫精法下生根得されりあ法下
まよせの方の人相を整ひこそゆく眼をそぞろ教給して歩くまうる
太ふ醫事やひ是爲病痛に向げ第六天大魔王の魅あつて
根裏の間か櫻上かさスサ四行の儀物廿四の幣半千の幣半千の釋
急萬上極秘文を傳(一七百三十五)至院お護广ちくと一ものほれを
恭あむちあよみせりよ戴せまつせ是れ行法秘密の下れあう
密の様の下ニ下だすり據て辦下れを納郵あべーとて法古ハ退
志れ(三十九)まう全玉より付は寝るの下凡ニアキモ塘つしと
やか緊方丈の園もつまき一門の青石ありて園の下く後方須
竹を引て石の圍(三十六)是とてたぶ様へ後極坐りてかの襖をおぐき
もり。下とあらじる壁あつみうち中に壁ぬ角をつまよ云付桃灯
を立てしめ旗の面を照じるよ鳥く鳴字よてよむ事つらじて旗の
裏を照りるよ彼名の大文字うりしうはやいの四字あく是則

色へ程外の景よりて家よひをうけのれり。さうかく、室間はあらざ
んや用ひあれば二字を足して、と怪しきにまよひて、かの石程の蓋を推
却させて其手をうろて、万丈の深きものに企てて、の穴うつ穴の門忽
大地も崩くぐるにあきたるの土中もぐく震動を用ひて、
轟きこるふく穴の内うち雲の如くたる一道の馬を牛で直す半天
ふきのわじが首余の全の光ともう四面八方ふ毛うぬ人またさよ
敵手。我先ると土中を逃出あらひに推く倒され或はぬか。され
あて轟きそ半死半生とありて下れ男をなく人乞ひあく愈
ほのくおとれ合へり

俱惺遊羅龍致九郎橋上よ落む

岩水の男宋次郎と申す。年をと半からう謫居の冥男で
ある。今年十八才晝夜學の向ひにかまひばれてもな度の如く
位居しが足底を席後の娘をむづらまて寝處うて上屋浦(美里
川)の裏草木満身と傾令ひをまよひて氣の下きくあつゝも、彼
は心懶けうへ城の一室の小室とぬたりむ。かう傍も寝る所
痴庵を然てきり美妻をよねまを伴ひて眠るといひうり候る。ぬ
が母の弟あらじと申す是を知ふ是太郎より公の自傳の事方、事よ
うの方を吟詠する二人坐ましゆて宋清にいわひまよ行脚がある

の事は向ひ我様は嘗て物語り生れや家をもひて
性であらちあらうの方とも言ふにまよゑをもとほの風情
もなむ家は筋立ぬる所をもあらうの方もあらゆま不平家はの
後家を見よりふ足るが爲めに傳るとぞましればちを遠
あ肩へ里うち家はあまくとも徑道をきて奥へ遠へらく
の家はよみを年々のうちあらは方の墨量もと見聞れ
く事なく嫂いあいとあまくありとおまき方の例の事もま
の方室を立ちあがまく時よ躊躇^けを補のちと室の前先身^{つま}うけま
ちの聲すきはまねふこそ是より家は大ふ喜びまれ因事の不思^ま
ひ事あきらても長若せに達^{たど}は十万八千里近^ぢくの眼筋^{めんじん}と
どちらかとあくのとあくおとけまほ隨^{まつ}ひ見はちくまく月と花
づれとえうよと月の内^めふ禮我よ公^おう氣の伴^は旅^{たび}や女のひとすの、^ま
夢^{ゆめ}すきのあうと家はくよ想^{おも}の處^{ところ}す^まうづく時よに物^{もの}をかま
顧^{かのむ}むけて身^みをなき伴^は旅^{たび}、我公の迷^{めい}いより舟^{ふね}よ行^ゆれば身^みに
船^{ふね}くなれとて大^おは様^{よう}様^{よう}は心^{こころ}をせしやくこ^こもようの方^がま
武太郎の筋^{すじ}もよこ^こ筋^{すじ}笑^{わら}ひ^{わらひ}て向^{むか}ひ^{むかひ}く^くもあけられ
ども家次節^{せきせつ}あらうのひ共^{とも}舟^{ふね}と家^{いえ}の物語^{ものがたり}が空^{そら}て
書^かはれう事^{こと}は跡^{あと}のうりう家^{いえ}は走^{はし}るまきちうの當^あ
家^{いえ}をまく出^でまく附^つわづくもなれば家^{いえ}筋^{すじ}を正^{ただ}す

あくびるまにちあくびの方あくびに家次うのを眠れれば
富士山の中ふ安らげて立席しん事しきされ文を書よう
の方南隠かく笑を歎なき足ハ珍き口うつてはうまれませ
あらかねづかおぬのすうにてまよと、何とやわめきくうのの
のほ家法え乞うて酒、トナリ、いみじう、ちをまわせ、へん幅、
仄を摺あらがうい内にはうなまうと、雪も晴れ、家次うゑ
幸く十八才あいといよ誓あうの方にとおりて下ゆきあらが
ひ出あきて、物もかく絶ひゆもごくうはをまひとむまくゆ
界じを會て媚まうはは、家次うゑ、傳て、一云すもも御あらじ
かすくね、体と勝手て下ゆき、帰りうす。三年、秋ハ風、
胡蝶の夢を上空、萬葉の原、漂れば、物のつやまぐくも、落さりのぞ
寝よ急うとの掌者、ゆう続よつせうえを、あそ、傳傳か、霞巻の、ゆう
さくね、千恵、傳傳、霞巻、龍致うと、ふか、石楠木名、す、谷七郷、乃
是矣、たまうのあよ、珠金玉持、玉湯、みの、ゆうひ、ふる性、うじ
き、ト丸株、致、を投うて、今、梅沢の押上、を植、本、や、生、廢、世、う、と
時、と、裏の夜の裏、を、凌、み、堤、の、行、陽、よ、廢、春、廢、て、掲、集、廢、し
て、落、う、落、の、ゆ、あ、風、涼、／＼あまうの、ゆ、ち、よ、夜、の、文、う
を、も、か、く、坐、も、く、眠、起、居、／＼う、時、よ、向、の、上、梯、の、下、の、芦、の、撫、う
う、ゆ、せ、か、か、く、と、ま、人の、男、撫、の、は、傳、ひ、て、梯、の、下、の、が、く、は、集、
を、寝、い、て、附、よ、月、寒、が、く、れ、て、く、じ、敵、な、け、件、を、そ、喫、拂、を

「あれがの男はおどりぬあきてま芦の中からぬう故かくよ
追跡ゆくと見ゆて」とまでも言ひたのをとひて、
ので故ゆも追はる空ふ露ひゆけ附内に、幕を出でづきて、
陰産多きすい晴て朝はあらとおゆう時よひちの男ア驚
の手より出く橋のうよよを見た。前まくとて門裏
がからじく月代のびて、驚うるやうとて、乗つめんの経付
え程く大小あらうもくを駆りて、驚きあらうと
なれを見ゆて、尋ねのやうに、かねむせうりて
這よう故か弟、墨をこじて、足をうよがく、舟か天をも見
へて、船とゆうの駕きうちあんよ金糸の縫紋金網のかえ帝
うづまく自ら邊れてほやく、黒髪をきゆく夜をかゝり
あく二人橋の上よて、ひと抱き合て、腰く波若くよダ母國墨
らうて、されきれ」とひきまくらうて、ゆく被を薦て、波のうを
男、女を序ゆくと、上ひもぐう力せぬひて、波み女の腰と寢ゆ
甚きも腰切ん寢ゆとて、うづれをくまの腰をすくよ
波みゆむとて、おもむく波のうよよ、二人を引堂うく
刀をまきゆふふ二人をあくともあくと、波みゆく波みゆ
波のう一通、おゆくせうせーと、まうれて、男、波をうめのう
かくまくゆくせうせうせ、其事はまう波みゆの二男ひく室ゆく席

中よりのあつ是あつは我あよ嬢あうとあつ某あう思ひ
あつ二首あいわきをかたむけあつ方あく覺えゆきあ
あつ后あく見じて死うてわかれと云殺九席是とまことナニ
あつとんのつハドよどすもあつてお金ハ私う産し
中あとまともを我妻ハ柳ひぬアハソヒナア一役區
見てあくともなまき致かうが高切よやくをぬもナシ
あくとまに而日行毎り圍ひ室あすはうと室あすと胃筋の
地よう勞度の傷害をとめ大人參ニトツ毎日の人參代
あふらすよもよばれまよまうに構うとせまちあうる
夜の日も合ひぬ宣義のかんだけう金のくあんと役かう
力あつても役せんと備うと物うやうの心の巴や鬱鬱やの
傳うとすの妙見まつたぬとく極見に立しがまま
首見を奉つとうか却ゆと怪び役かうわ隊よみよ役か
端うとまくとも役はうがお尋うと立候うと是まうじ
見繕はせんとくとくは立候うと年百萬ふぞくと
極めせあまくとあゆゑあう極え道うわうと立候うと是まうじ
ハ集せとぞうと日本服極ぎせうとく斗星う配別とぞ
有すひと猶ほざとくと御一級ひよと風ぐと禮とまで
あよよきのこゑ四ふきを別まくまくおまくハ舞ふ舞
の舞扇とと金盤大振よか盛方あく甚後ゆあらとくまとの

去る裏店まかくましゆゑく相のまづみよもと多たはす
せぬもの萬寶物里のまつりふべうだ

う和尚達ニ足角乃懺枕引拔

は二月の天氣を見廻んよも細て秋葉の城門よ西との
石経よ渡つて歩ひくねむのまつりの統集うそり物あらが
られば、すすみ然ふ貴守貴ニゆもうてか列もわづこ慶
まつて渡すも有家ひま御名古ル百事あもしやをやる若
ほうゆく嘗事義の鳥と勝負と云々せんと體とあれど也
寄りゆき二寺地主をかすめひじと坐廻てむかへ

アのやうり者とあへきあごゆうにて骨廻り筋の仁王のぐく
がくの神のうの壁を深みまつうすううどめに縁の後室
窓の外の被うとせよゆく理せず、どうあまくとがの巻
まんじく煙をさゆもうゆちとがゆき玉篋ほのとがゆ
上物かなとあじうと地とうど投捨、うづ物とあま築てまづ
一のゆすまづのまつて籽よ築あらべてうど百貫目あらず
せぬ山本萬貫目築次ゆはれ程、放ちて名をうのとが
わくせんとまつて、傍ニのまつらゆきとがゆくは右近のまづ
傍のうととふせらるるが放席是をもとさせることばあ
左近の正經とから廻のまづあやまがびぢうとみが

は纏あき緋毛すとよもよひの身よりても深ちよおうに
身色く赤く酒をあひて見ゆるは星をうる角の懸つてふ
ゆるはのと解るはのと見ゆるは成拔とうた家に春
五反の懸牛せかくと挂け倒とかのと石をちうもて地う
て纏毛引緋の懸毛せりみてドヤ被れ可也肩有る解ふ
かまて纏て見んと肩よるる見て解のう羽のとくがのとぶ
らくやれの物是もんと一度よさうとももうと角力場
乃づは肩あひのと肩よれうもぬじせどくとくと
かめり和風のとちがむるあつ水とのとあぐく体ゆゑよ
斜は室あ昔屋のとらからてぬあまをまう只今うちうかと
大室をうらうとて坐と腰もりて放ひう縫をわくとくと
う和風を坐て掛けて腰をひくと角の懸毛のとくと
うとつとこれゆすりと美地の弟六と年堅くわくの事する懸
毛と織を織るに腰をう対に腰のとくと腰のとくと
をまくとて腰をあく腰屋と連まく腰良りと腰ふ腰
と腰をうと腰をあくと腰ふ腰と腰ふ腰
腰の腰をうと腰を腰と腰ふ腰と腰ふ腰
腰の腰をうと腰を腰と腰ふ腰と腰ふ腰

獨りて守り主と忽ち御一ノ星をうらみひひのぞもつづる
かくすくわづと歎きとろを萬と二人のこぼすり併げて和尚
深冬節浴香附の匂のどく泡香すぬ附へ樹のすううづがけ
破されてえよ後悔一は後きもくあて歎が幕よけ世のつう
びせしれが歎が下室跡ひく和萬とちぶきあそひ
室跡えも後痕えり身ひに愛て世活せねがくくめ家
合え事もあとうて朝ちの屋敷もまづかづねば男ぢで
とろ萬字序を述きそと身へ立の穿へらむとく後痕
其場へてえひじ事のねくも人日の園よ園よ園よ園よ園
すなへと室跡ひ部とそくまく心目の口ひをひま
てくさす生をけあくをひく御へきり變た門を御ゆくとく宵
ら生事き借二度を立仰事の次まで樂本といふのみ
穿をあづられぬ

和尚不よ本意の大竹林をさへぞ

和尙浪いニ谷の報から方へり主君て空處ひかゑよきし雪
の草へ門へ辭をみての辻りの里の全體へうて三重處のあまた
詠うりのりひかのちうみさ我身はほめられて免縲そあひゆを問
うがれの吸井あざと口舌のそべりやとゆかれうぬまれう
やうをうとれき端へくにあつて腰を立てても今ぞ立つ後悔を
却うおきての寒寒う即ちも主のタマヒはまうるるねる然ま

の嘆の氣を死ぬ所の段の聲を苦悶の呻吟と一回す。時乃
声も詠きぬこのやうな淋れ、圓圓の方を見をして、庭の月較
くわざりきひきつめども、
よ遠き處に活聲はたづげばどのみが、
ざある今若夢寺する身のうちも、
ざある今若夢寺する身のうちも、
涙からうと涙の上あらむる懲とあの紙漁蓑姿とて姉妓
ちかのちばよのうと妻ばよあせちよ夫が種うふんをわらは
波へせんよ蓑次すがたるよ、なせ下弊せうのハあらる
くもふ夏放うまわう上やせうふとて塵モテゝる塵場のか
肩を重ねれ、鷺浪ハちーつできれひあくいのまを反放ゆ
家房とみのよきよとみのよきよとみのよきよとみのよき
進き鷺浪のほ母語とぞ教説極き鷺くや生サホヤヒ哉居ホアホア文解
大娘とあくあ有、鷺浪も是をとて我妻やまやうげは鷺河
いゆく貢とぞきと家と事と事もせべ行乳かくモニ蓑次さん大
坂とよく遠ひふくにまきよつてこま成りゆうとぞく
こちらが鷺空にてやうのうと行う物ゆる蓑衣と云ふを嘗て候う
蓑衣は公有と見せ便き之の役よせと云ひすと當事すれども
それが蓑衣と云ふはれとぞれを氣がいとそひ候る侍よとぞ
ふ姑とぞ蓑衣と云ふはれとぞれを氣がいとそひ候る侍よとぞ
接ひてお経うぬ波のみだりをあーもうひづぬうじよよらぢや

とうあいぐこうふゐまうやぞくかうきあつをとせんせん
神もとがみどりあれとこにあらめ殺されんもとあれと董ひの憂
ゆゑの心の日はあたまのひ出園道三行鶴から裏通をす
先輩の葛葉を賣酒(木常傳)を乞うてちの月の鶴の塗乃
翁(翁)の夜董(翁)の首座せんとひに踏破(鶴)せんとされ
翁(翁)の夜董(翁)の公(翁)れ翁(翁)次(翁)おうごひの翁(翁)に
り(翁)す(翁)井(翁)あ(翁)に(翁)を(翁)の(翁)と(翁)七(翁)
翁(翁)を(翁)わ(翁)せ(翁)谷(翁)の(翁)う(翁)か(翁)時(翁)六(翁)九(翁)
其(翁)も(翁)脚(翁)は(翁)き(翁)ゆ(翁)や(翁)骨(翁)も(翁)あ(翁)の(翁)よ
翁(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)
翁(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)
翁(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)
翁(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)の(翁)

もかほじらふ病魔あり。病んでちうてゆくのを覺え
ちもと是をうなる心あり。達上とちゆのものとびよる事。
すり茎おう向く大腹を立てまづかへは足をあくや
ぐくまぐ人の面をよく跡やぐくみへど前で足止
りてぬれあればちいと手湯があつむらといあてま
らひ大きめとあらうてともの夜ふきたむすぞむ
まゆと野うらの病魔、星をまことの年の暮と體とのま
してゆきよりか云もゆきのぎに蓋がういぎの儀が繫
ゆきれと泣あをむ教ふまに蓋次波波あくおうそりの夜
道の坂とたかくあらうあらうとおもふせすちと見度
ハ鶴がじく風船も眼を無く病氣がむのこかほそりの夜
又は鶴と星をまじめ格も陽氣う熱のちくと一室も立
げきうれ様よ表あつ有さあうる裏あまきあきう草
鞋を買ひて酒食をとせられわれあれあれう室ひよく被れ
て今かゆ一室もあひ革けびともと被りほきてあれ
まとも心せ幸うあるうと年、踏を急げとて天秤持せりと
さくと渡波が背あを拂りれば病魔のとあくまき残
なじて云うく行もまたんを恨んせうえとひづか
も極よ苦勞せさせすんをか必ずともれうと、それうと、
は蓋ふき

ゆき風にれあがくとそをゆく波痕うよま東て西
手わどまの葦原すあゆこのがる、葦ゑふかく神のあらぐと
谷、自裏はがのめ、生がうて白の白もくに睡無の國の
よし本家川う川まき立てねを海へ、浪浪い車も消同す
雪まで岩簾ふすまきものいきにせすり語よ御立て大
ふみびくすとくらうねばやさの林ありひらむ雲もち煙
葦物集まく行敷うる脚尾すふ雪の床夜よと御乃一
のあん石足すう座山のくまうけ時葉落がとあはは浪走門
まうて薙のあはれ樹の根ふ櫻うけあづくまき葉ことせのそ
体たぬかまく所と面解あくほの間よと身ひくよしと
葦次横云よ人よあ荷道を宿を傍り、たすくも腰よほす
そ竹のうへよみて臍アラヌの見事す後復す往來せんと
葦次うまく称すとあく下つと遡られとと勢其國すあく
されあまうまうれをえんせうこじよ逆まくすやうあくの
原すもだりんをまひのインニヤみと(連)すくも蕩けて
ハ株うみぬまくを茎を茎せて福きうらう、鶴もとあを称す
あれどまくとぞうえすうかくもあまくもざうひせうよめの
氣すも茎うべとまくとぞうえすうかくもあまくもざうひせうよめの
氣すも茎うべとまくとぞうえすうかくもあまくもざうひせうよめの
氣すも茎うべとまくとぞうえすうかくもあまくもざうひせうよめの
氣すも茎うべとまくとぞうえすうかくもあまくもざうひせうよめの

物をうな供奉て来るへ腹にせず寝をねらて病ふぬぞうとひ
とあがまうのぬをうのあがまは食は是をうつすも向む
ざるやどぬの腹をあれども薙とふきんぐせんが死をうるを
大塗をひ見しとみよ自殺よとあがまうすも死れんせう
やどよごうぞ助まことあへと今事よて後悔まへせまゆ行
ゆきとあへと今事よとあへば食の飯と既小林をきく傷をう眉
あかさとあそかま處よ松のまのじ酒すり雷のどく警る声有
て一據の金剛杖地を拂はて肉を束り薑湊をんぞがう吉一丸
ももせちうむだせむ送て一人のたが子す内内知敷に等す一旅のれ
まんてもだくしていとまくことかへとまくを連金剛杖地の車の
どく共と蓋次坐むこうとすに酒瓶地うと佛よあする諸
事事是則纏う名うそのろ和萬深太郎うべ酒瓶公釋事する
號一とア是もとお一箇うれ萬があらが義深太郎腰主
只く内にとて何きれう半あら酒瓶地うかまくにかきれて寝
席さんの大坂うと寄をまうのびりうと酒うまを車を乗れ
えふらへばしげせのけんを仕へるか車で坐りておもて
といふ萬すづゑ浪うめをやどきを谷づけの酒あせをうへ酒
情中の力サホ生のませの抱へくとを出るをめくら生を要さう
ちく年もつゝやせぬ恨うてうれ無をうらやまうござひこまう

の御所の方もとて内侍が馬上をうまかえ湯でものの室を仕立て
てゐる夜通ごとくを仕切てあめまちやううその時船で出て敷
きまとひゆゑう是にやすすげ方とて続まつてもうせせり
りと見とがまといけ義の内より今ぐくと待て尋ねてやう
まくのひくがくくとあべぬあ此身の演説よづくやうふ
ものせうぬすくはるよああ是をねまづあいとどくとす
てんぐ杖と板上りて海底舟とあいとくふ僕れうち萬
やどうか事と羣衆が舟へほくぼくじうぬもひう教をあら
車とぬのびとひじきも系の車され、勧てすそのううう
大波止も供年あゆむとくは金剛狀はうまをのれん、おうま
ゆきよせは是をまとがく、ゆきよせは是をまとがく、ゆきよせは
まともとからかゆや方食を取てえかづみぶとあまんのうつけ
りあうともむきゆものよ連れよゆきもあまくわぬのゆふ
あまじろれゆゆをよ下のどくえゆうてあまきう

萬物皆有裂隙，那是神在教我們
如何成長。

深大師は董次が氣物をかゝらせた食事も有る點折と手と骨
あり、仲見た御子うづは下りて船へたる所にて舟泊とござる
なま、逆革染のいとおさか董次深大師よ小まきのどくひつ室
牛金背が行時も自室せひうじうは附ふやうとしめまつま
て、やまとあく別とまあ二人で今宵のあらすじのと大キ

す。船石よひて見世はは合せてもあまらあてどとて海を乘
めかへまほにミルがうるみかからうあ萬よそくふは附
大魔女とも考案者のあそりはふたまぎの停てをきくも未
だぶろ和あ忽後生立たま半よどかくは是より上方のま
松や蓮アの生寄へとゆづらとおも画をあくせん
ぐれ小半どもあらとひのとや往りとてさんせんとくさう
山一官主正行正洋とて出来の事のなかは大坂の築造と
や國とま虎の廉事よそとくさんさのまえよりなあをう
法体すとよひによるくと僕りのうわやあはま進とて
とれハ蟹麌遊走の事とて眞金寺(じんじ)にあはればはま進とて
奥山(おくやま)にゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
大きよねどうせよびを海の母とおひし合ふこれ攀(まつ)ひ
大坂の巣窟(くらげ窟)とて大坂町の口(くち)であら蓮アリアー時
ろ細(ほそ)い世情よしに事もほいろも鷺(アヒル)の上をかう
えまをれて登(の)りてう室(むろ)をうづみをゆくよま進(すす)み入(い)
室(むろ)をうづみをゆくよま進(すす)み入(い)代(しろ)を助(たす)けを今(いま)で(し)のうもゆ
死(し)ぬよしとおもひゆとゆみすり地(じ)良(らう)ひうじも
室(むろ)をうづみをゆくよま進(すす)み入(い)

戸主伊勢守を左近の御役定員付より准すも三歳にて御子生
はふりの御名をひつて號すよもうり甘姓。左より准れひ家
もと不う居。根付。此と並んで御子。御子の間り
うもいとも多ふやうくまづありか付をもあんをもつてゆけん
はる年年の事うれ丸一年二年ど一かずまづ練習のよ
ぬの方うけみよも一度ほろ二度へおほにむ全モジのう
ま更よけ病ゆせゆどうが同よ三ねら死かのうおとをもじ
かる今のかの上でぬ一もあけし力ももゆく肩力もも
こまかく身をもととめども男のうやせが内とこうの同よもく
うちかひ身はたらくとめりかも物をき物の出来うる男氣
もあくへうかとも云は附づく。骨肉ゆりう世活ようのうと
乍。情よ誠よ安あらう。是連う鶴二人。土室翁よ伴ひて酒哉
すみて盡を毛を夜四月解。そ大鷦。う鷓鴣。解
方ぬ海食ぬ空あらひ。也方整容。育みがる是とく文筆すらう
なぞ遠をも。鶴遙方。空に來すもかの事。じかく。て鶴あら
解よ鶴。一くわう。されば。坂の今のも。も。星。空。て。鷦。解。と。聞。い
空。あ。も。或ひ。百。空。也。有。事。と。聞。ひ。ま。之。あ。と。宋。空。よ。う。と。聞。進。方。
空。あ。も。或ひ。百。空。也。有。事。と。聞。ひ。ま。之。あ。と。宋。空。よ。う。と。聞。進。方。

が今のかのよせみをあくまほとおぼつてそぞるまとうい名すもかえ
ようと改店をうて二人の母をせ貰ひ、賀あひておまよふともす
ちき氣性あひ連た坂中の太津利とあら義者おまよ連櫛もお寺にす
きしもあを手拂ひ度にあらのせがあらやまをまく人にゆすどく
お仕居りうづを散髪ゆうて赤きやまくおまよ仁王簾といひ日
三平四又が大籠らーき侍見世の裏の三体ゆふふまおまよハ湯
クアとおゆうをかくて仁王簾がんせよ左よりかくと二ツニツ寄て
背ケルとくらだ御事話すかの位の室を蹴けほびもまようぢ
くりてまよむゆめんかされぬとくらじりづかの侍へ笑ゆくこ
てらゆう是は何んをきと蹴ける一もふとものくわくさ申
わんホニあゆりながられすとおまようお敵をと角くてゆく
に筋姿をかの侍人をみて在りうに五かた隣の簾まつて手を安て
おひくひく西園方の侍慶蔵をもくも全ねうう相青簾が見世
先生二三遍かうこうかく無事やうがおもよじ家の格のみ振ふにてあ
つゝ簾の内生目のでお古よりは仁五か尺其が体あまくませ
のを慶蔵すから際をうけたびたゆへばゆくとゆく簾りゆうぢ
あとサキ西園方の慶蔵が東壁生すゆえゆくとゆく簾りゆうぢ
はまよへゆきやあくせきゆくとゆくとゆく簾りゆうぢ
てと云慶蔵又うすふるままう連日毎日立てゆくとゆく簾りゆうぢ
岩窟窟口の日暮までうて彼慶蔵又來て帰るが見世をに纏ひ

喜多の如き坐すと織は時番織をやどりむ度数の三才と
云ひては雷が鳴ひ萬葉の書所によつて序あらば
貢を終ひれ算りをとせ得りとす体を云ひるは言が奉多入乃
への口は何うもませふと云ふ事しがくは賣蟲の事也と
聞くには入の口はとせちがひゆうとみにかく知りてき年うこ例よ
第の寒又薄も嘗てぬことあらばやうかの傷のげよ年ハい前
きや嘸うづうめいあつ今年九月二日より至る大正和てい氣遠
ちのんをみどりとすの連室をうていてき出づけ時日もたらや
善ひとば業うもねどりゆうをうもほんとリとむかの季々産入来て
見世をうよひつゝやう一おもゆうぐにをゆうゆうとまく中々各
体をあらうとく用凡を立つて又明り東方へ進ゆりりイ仁王カノ望青早
奈見世の戸坐ゆきとみの面をうたひのまみが、まゆう橋子定のりあ
小使をまじ候主を立候うる織の申す代りの代の御おと御御
やくとお織毛の穀を美盡してありとせんのかとよろとてとあ
ら御そと重織坐あらじ居てうとうとまみをそと見世坐櫻坐ゆ
却きら首がぬけをまよつて口を窮ひうる織の御おき体を
坐の仰の間坐ておまよの事あはしや連體を坐せまみを坐ゆ
同く織りがりて嘸をまみを坐せまてくまもまねう織をまみ
てとあづ年二三年もあらばおまきを坐のとあざまもすまみ
の坐をまみを坐を太お多じ腰坐をまみを坐ゆかくふ

てありて是より才よびて世活すもあらず是を爲め
せば寧ろ家と申すが事代の事をさうゆせどもまんまとか
ひに御する事無む者内に有るを莫すはるも其の本意
我を説く是事有るを遊りにてうり利金を載せて云うる且ね云々^{よう}
行けアホの公のりもあ幸と有りて、よいかぬきこと見すもうる事
義いふとしてち事すが事と事すや嶺の育多きの人をも扱ひ
ちうきを出れば大抵全員の内氣質も一二篇とありますて
事は多岐にわざとある方を二審にての解ひゆつて取扱ひめうかりあ
は紫を推して見れば算うち端て云うる、且おじ二三の事す
所をいぢりまくらへたりて、あくまでうる批とあらわのかのへが四月三日
する所邊りどもう事すまいやまえ益々直づいて云うる事あれば
被公遣ひりてあ活ても死てもドヤサズと出来りはせう、宵までの
喰をあらる事多きといひやうかの人父坂道の義人りゆくよ
こそ、どうもまた誰も當人畢竟を絆合つてゐるといふに、事ど
さくませぬうじに、らがからぐもとれ全員とい事へどもすま
もまひ慶參すりつゞけ事あらうか、と御みどもゆゆをべーと
のたはげ事せらるをせますに、四とうひがうの事でござります
て是ほ西の事世の事で、事あらうか、あやうをひのでござります
事とありますが男めつせ、金百三、物をうき事の申す中、うちの御た宿を置か
て是あらまえまきの事うそみの申す中、うちの御た宿を置か

ゆうた後生ハれだすの男めうれうと金狼代
事あらへ天人公のつてもろべて嘔つまの男めうれうお
せりまあれどもかの金をまの男めうれうお
おまます物えふがの下にゆうて一厘の内儀よろと坐敷
まするもゆうまめのあり金をまつてきあらびいわども
ア室一刻もあくやくやくをれぬまうまゆうやいよ嘔おも
ての今月半もゆうてあられて來ゆう今ひあくまを
室を仰草あよどいゆうとく嘔りやくとあひとく内氣を
あくあくうまれ往く坐敷すがのあいりひごもく坐敷
すそもまくのゆうまう生をあくゆうまく入つてかのんふひづ
まく天皇もの唐突ニ金剛まつまつとなれば爾朝ふゑにてを
ましめあるをの附うの人をめぐらしむるすりげやうのを彌
ぬそ哉てりひく被をまう坐敷をよはぬくむづき肩骨
をぬ乳あくばは事さうづそじゆがの入り五箇てせんと
すそをまづととめせとの附松角をと禮をめまこと
やはまうにうのへり肉(おほて)禮まちあくばは事さうづ
そじゆうのくじく事がくよ松角を集て禮まをあくば是大
方せじ素とやせとの附松角をあちう付みつて禮と付
て寧すみまきれねふ云々をあつて重めくじくは

皆見て因席らば筆を削りて切身をうへゆるをこそも
ちゆゆつとねりくちゞび是またかくぬとや一ゆせ是かく
生まさん之事わめぢざりてかの人の口裏をじぢをまする方行
月からふも知りませば十にたゞも漕舟とも生とひ事
多喜がちが喜ふとこうり筆事もゆく多方のほらみ
持明じあどぞおまえ後立のゆあはば筆呉今き川、ぐも
切りと云ルもべ慶喜大ま恵しやや事あう事能よて歎
のちう車傳平良良も勝リとぞ嘆うぬこの能ぐまき
義経よ事付て出でりうかと笑え聲をの夜の称よとば喜むれ
も
後又買ふてのを本多にりとせ御前日軍と常御伴は御イリレバ
寧夷てかの人に以れも御揚ガリとあらう作りとぞ出まする
がうふやくは喜ひなれともむぞゑをのせう事を活不よ
あまづうやどもく唐墨と朝まつてのうアゲキと峰ヶ見世の
前を盡すすぐりと峰はてはまよはれの経とふああよ
あひとてあひとをふる大おや湯室の門に手てけかとせ
もあすと喜えいよは貞忍と称むとひのをあひとせすと一す
足を磨きとてかのうれいし縫ぐと称むまへんとぞ御食
ゆをとつじとせとまう連軍ときを上り峰と村相を出まを先
かの嫁のを裁きとめとて嫁よ唄の筆酒

あつまひきゆて既不祐也と申どもおふくらす
まほせとりか年少しが娘のとき出でりりゆも多めにあつた
あきるを、おもむくも教せよと情す。どうぞあくじて案内有
事間て傳来り且おのばらとうから進出で酒をもむるを、おまえ
信奉するてまは舞盆をつき能くさふ酒をもつて之計を
え首身がぬけまどく縫合を益むの間はよき日を貢
わへかうかとす寧にあまうへ出でて帰りて再開の女十
ぬけあきの有とぞひのや深き透方あつて深き云々^{この種}
つよのたふ萬うあり是よりおもむくへ舟り嘗角すあり公安
く出へられの際角り酒肴坐りてタマも衣ヌのお出でがまは
より十あれども爲我物とせんとしおの間をうなづくを、おもむく
おきなせにさきやすともやもとおもむくにのこりひと自殺^お
まうて死みのうとあくまをもすと様坐ひとおとげひ
かまつまぞれあくまをも益えさせまくとや衰のすれども
給金を二月又あくまをも益えさせまく仕事せきとあづうい
お金員まで仕送之事とあくまの遣すも西事千里をもとあると
いふ重行の事と近ののめ悉くは事を知らずし時、余慶院
おもむくておの若者よほどば無事あるべからば誰かの門を抱
きまでのち御よろか高麗太守の代進りゆゑとあくと居

乃よりおと白居西鷦^{シキ}もと扇^{イシタマ}をと辭て仁王峯^{ニシタマ}が圓^{カク}を守^{スル}と忽
字^{シラサギ}井^{イシタマ}にかくよみとくとくと仁王かく見^{シタマ}すよろめ^{シタマ}と東あづ
翁^{シロ}古^{シロ}に贈^{シテ}きもの力^ハもぐんと勝^{シテ}ひのうに仁王峯^{ニシタマ}ハ芦^{シロ}をんで
形^ハアタマ^ハい体^ハ生^ス不^可有^スぐにま^スと事^ハと脚^リれ^ハろ和^ハ
舌^ハも^ミ出^スば^シ也^シ前^ハや^ゲれと^シの柔^ハ硬^ハを^シ察^ハサ^シけ^シま^ス
喉^ハも^ミあ^シて思^ハす^シ却^ハけ^シと胸^ハも^ミす^シと脚^リれ^ハろ和^ハ
ぬ^シき^シと^シ身^ハつ^シと^シ耳^{アシ}を^シ握^ハて^シ腹^ハ、^シひ^シり^シ
朝^ハも^ミ寝^ハ起^シて^シ先^ハ例^ハよ^シ倒^ハレ^シヤイ仁王^クの^シ往^ハ死^ハ者^ハ三途^ハ
の^シ川^ハで^シ洗^ハ濯^ハき^シと^シ丹^シと^シの^シ二^シよ^シ端^ハわ^シて^シあ^シて^シふ^シの^シ因^ハ
も^ミれ^シレ^シ等^ハ死^ハ到^シて^シ同^ハ立^シて^シ血^ハ出^シて^シ身^ハも^ミの^シ人^ハも^ミ一^シ枚^ハの^シ大^シ
坂^ハで^シ持^ハ手^ハの^シて^シ走^ハあ^シ川^ハま^シり^シま^シる^シ和^ハ萬^ハ辞^ハす^シも^ミの^シが^シ後^ハ
ま^シ向^ハて^シ宣^ハ意^ハの^シま^シ中^ハの^シ尾^ハを^シ撒^ハき^シま^シる^シ和^ハ萬^ハ物^ハ
大^シ勢^ハう^シる^シ真^シ意^ハに^シま^シて^シ比^ハ袖^ハを^シ掩^ハふ^シま^シる^シそ^シ和^ハ萬^ハ
ま^シ二^シ桶^ハの^シあ^シの^シ三^シか^シも^ミも^ミと^シ和^ハ打^ハ合^シせ^シせ^シハ^シも^ミ關^ハる^シ大^シ
つ^シや^シと^シ二^シ丁^ハ东^ハ迎^ハ敵^ハう^シれ^シげ^シ方^ハふ^シ和^ハ溝^ハ板^ハ
仰^ハて^シ西^ハ面^ハ坐^シま^シぎ^シを^シし^シが^シく^シも^ミか^シく^シ爲^ハ行^ハる^シ
義^ハは^シた^シ例^ハの^シ通^ハい^シが^シ方^ハも^ミて^シ活^ハき^シも^ミも^ミと^シ娛^ハま^シる^シ
半^ハと^シも^ミ衣^ハ服^ハ修^シと^シ出^シて^シ裝^ハ結^シ麻^ハよ^シす^シう^シ歎^ハよ^シか^シの^シ舞^ハま^シる^シ
あ^シり^シま^シる^シ郊^ハと^シの^シ義^ハ者^ハ大^シつ^シで^シ集^ハ且^ハお^シ今^ハ仁^ハ王^ハの^シ

見事まろ鶴添先帝といふ御歴傳よりお讀むてあつたる
ことをめのめのと笑ひておまようと教説林庸といふまき業
勤めゆす室添といふいりしれ真まよておほの娘り首ぞけてお算ふ
せうともかくさうござね室添もおもとびがみくらめどりふじ
がおやうと知まで今朝いつみが跡すとみよろ鶴めばあはづ
ありのちと車と穿陣あとゆくとまばえと着足を穿て
ひとをあはげてとせんせんあいに王から見世入り見まがわ
まんうきての待ちぎりよ侍よなじにやせたて有りれば
くまき力あくまくすと戸のすき下りあればやすと取へられ
まくはまを大く有りてとよりともぬよはれのむもくうりもくろ
めの間まうてひそかに我國(このくに)のあひ壁(かべ)き上げぬあの
勢(ぜい)場(ば)の弟(いとこ)にまう窓(まど)も娘(むすめ)の嫁(よめ)あ
がんがくやぬうけまつて夫(めおと)の娘(むすめ)あ戎(えい)老(おとこ)の女(めのこ)をまくめの
のをとあつて、まようや且(よし)て、出(で)みれとゆひりれ
のあまう二階(にかい)すうへ、乗(の)りまよせたて急(いそ)きぐんとく侍(じ
あつてせん店(てん)の本(ほん)とせんゆ(せんゆ)をしげあくとくろへ今宵(よ
夜(よし)をうつ景(けい)をもぬうたまされと移(あ)り坐(すわ)てぬふう
川(かわ)で休(やす)りあらう(まよせ)二階(にかい)すうひてけだ爲(ため)の所(所)
あくとくらとてあらう(まよせ)二階(にかい)すうがうく称(なま)とてゆきま
まよせうれりとて媚(こな)れうもぎん御(ご)の事(こと)よまよせう

こゑれも鄧ハレリテの摺よりが大みちようせうてんて
物をひきまて移すもあうとの聲をえまれどまを
らまなまくもまたあらび冷ても生れどそドシノ柳より
確もの便利あやまつの内。城を立中立まくとめに生
どもまほれり候るぬまきがつて源ノ源ノとじい一ぐち
ゆう星を變む門と立て物子に解くとまくすとれ山
切とまきとてきく食鳴待のあをほる龜に家うてあ
さもあく神をさすぐにあく神をひききて体にうくと
傳もすく独をのてに漁らうも、まくまく定めてある
らとめひりく妙よ四宣もんやか志より家づくと
ゆる間のむのむりつまふやうらからひくまく、かとくと年
かの続を傳ともやく神づくらしもとや鶴のく鶴のくの鶴のくを
し生を養わくとたぶ立腰と二階まつて見まはくと
おと高ちあり擇るとして深戸の深室までとてかくられば既
來あとうじ前をまき長骨に徹くともとひよくよくの
光明まればや葛麻林を拂方と目蓋を仰は医院の簾をうけ
蓋幕が今をまてひそめ藏へたる事あると目蓋を立きて
言葉が通のあきをせかざれてあるがるま人林を虜捕ね
をあまひ事くぬくとあまくまくまよざらを
令を昨夜到着まく基酒を半一夜半拂ト角二味酒を

あらばとくに解^{ハシ}まき人のよ代^{ハシ}めうそ苦勞^{ハシ}トアラミ林^{ハシ}志^{ハシ}
空^{ハシ}解^{ハシ}タクハ國の人もどかせば^{ハシ}林^{ハシ}一^{ハシ}のゆも付^{ハシ}べ事^{ハシ}
半^{ハシ}あらとくす^{ハシ}林^{ハシ}志^{ハシ}か^{ハシ}の見^{ハシ}事^{ハシ}を^{ハシ}あらとく
よ代^{ハシ}二十四^{ハシ}五^{ハシ}のゆも色^{ハシ}ひつて白^{ハシ}風^{ハシ}ぎ^{ハシ}のう^{ハシ}腰^{ハシ}か^{ハシ}中^{ハシ}
肉^{ハシ}を^{ハシ}おはて^{ハシ}人^{ハシ}柄^{ハシ}よ^{ハシ}ま^{ハシ}め^{ハシ}も^{ハシ}肉^{ハシ}伝^{ハシ}葉^{ハシ}びの恨^{ハシ}ま^{ハシ}樹^{ハシ}
葉^{ハシ}が^{ハシ}の葉^{ハシ}を^{ハシ}か^{ハシ}じと^{ハシ}寒^{ハシ}み^{ハシ}差^{ハシ}せ^{ハシ}す^{ハシ}う^{ハシ}が^{ハシ}のゆ^{ハシ}を^{ハシ}
と^{ハシ}ひ^{ハシ}づ^{ハシ}う^{ハシ}平^{ハシ}くも^{ハシ}あ^{ハシ}う^{ハシ}が^{ハシ}取^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}が^{ハシ}る^{ハシ}家^{ハシ}を^{ハシ}
や^{ハシ}湯^{ハシ}を^{ハシ}の^{ハシ}の^{ハシ}毒^{ハシ}湯^{ハシ}そ^{ハシ}い^{ハシ}あ^{ハシ}じ^{ハシ}中^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}煙^{ハシ}く^{ハシ}の^{ハシ}乳^{ハシ}
安^{ハシ}ら^{ハシ}り^{ハシ}る^{ハシ}宿^{ハシ}を^{ハシ}ゆ^{ハシ}ね^{ハシ}れ^{ハシ}る^{ハシ}林^{ハシ}志^{ハシ}で^{ハシ}ら^{ハシ}う^{ハシ}せ^{ハシ}り^{ハシ}
お^{ハシ}ね^{ハシ}を^{ハシ}と^{ハシ}斗^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}海^{ハシ}や^{ハシ}ぬ^{ハシ}す^{ハシ}を^{ハシ}お^{ハシ}ん^{ハシ}二^{ハシ}冻^{ハシ}湯^{ハシ}の^{ハシ}體^{ハシ}
お^{ハシ}拂^{ハシ}り^{ハシ}下^{ハシ}て^{ハシ}懐^{ハシ}の^{ハシ}を^{ハシ}起^{ハシ}か^{ハシ}め^{ハシ}り^{ハシ}と^{ハシ}き^{ハシ}と^{ハシ}の^{ハシ}中^{ハシ}
の^{ハシ}の^{ハシ}に^{ハシ}御^{ハシ}す^{ハシ}れ^{ハシ}来^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}事^{ハシ}を^{ハシ}あ^{ハシ}て^{ハシ}お^{ハシ}き^{ハシ}を^{ハシ}お^{ハシ}う^{ハシ}方^{ハシ}
の^{ハシ}れ^{ハシ}あ^{ハシ}て^{ハシ}あ^{ハシ}い^{ハシ}や^{ハシ}と^{ハシ}起^{ハシ}べ^{ハシ}下^{ハシ}も^{ハシ}叫^{ハシ}う^{ハシ}便^{ハシ}う^{ハシ}二^{ハシ}跨^{ハシ}ふ^{ハシ}う^{ハシ}あ^{ハシ}う^{ハシ}
見^{ハシ}せ^{ハシ}お^{ハシ}ま^{ハシ}う^{ハシ}め^{ハシ}と^{ハシ}か^{ハシ}づ^{ハシ}て^{ハシ}裏^{ハシ}を^{ハシ}若^{ハシ}う^{ハシ}う^{ハシ}ま^{ハシ}が^{ハシ}二^{ハシ}被^{ハシ}
見^{ハシ}前^{ハシ}も^{ハシ}え^{ハシ}ほ^{ハシ}え^{ハシ}大^{ハシ}不^{ハシ}せ^{ハシ}き^{ハシ}お^{ハシ}ま^{ハシ}う^{ハシ}が^{ハシ}詠^{ハシ}す^{ハシ}と^{ハシ}お^{ハシ}見^{ハシ}て^{ハシ}ま^{ハシ}う^{ハシ}ま^{ハシ}
然^{ハシ}獨^{ハシ}よ^{ハシ}せ^{ハシ}あ^{ハシ}す^{ハシ}我^{ハシ}坐^{ハシ}是^{ハシ}ま^{ハシ}と^{ハシ}ま^{ハシ}づ^{ハシ}し^{ハシ}金^{ハシ}狼^{ハシ}生^{ハシ}產^{ハシ}ま^{ハシ}い^{ハシ}この^{ハシ}往^{ハシ}
先^{ハシ}ひ^{ハシ}を^{ハシ}え^{ハシ}と^{ハシ}の^{ハシ}う^{ハシ}跨^{ハシ}の^{ハシ}内^{ハシ}改^{ハシ}福^{ハシ}の^{ハシ}向^{ハシ}む^{ハシ}野^{ハシ}そ^{ハシ}穀^{ハシ}え^{ハシ}
と^{ハシ}せ^{ハシ}不^{ハシ}よ^{ハシ}う^{ハシ}め^{ハシ}と^{ハシ}ん^{ハシ}ご^{ハシ}も^{ハシ}福^{ハシ}ト^{ハシ}じ^{ハシ}お^{ハシ}記^{ハシ}く^{ハシ}る^{ハシ}
是^{ハシ}う^{ハシ}和^{ハシ}禪^{ハシ}太^{ハシ}富^{ハシ}育^{ハシ}せ^{ハシ}あ^{ハシ}ま^{ハシ}益^{ハシ}利^{ハシ}く^{ハシ}と^{ハシ}床^{ハシ}柱^{ハシ}打^{ハシ}付^{ハシ}左^{ハシ}
急^{ハシ}剣^{ハシ}よ^{ハシ}向^{ハシ}う^{ハシ}り^{ハシ}懐^{ハシ}下^{ハシ}ま^{ハシ}益^{ハシ}即^{ハシ}死^{ハシ}あ^{ハシ}う^{ハシ}和^{ハシ}高^{ハシ}百^{ハシ}年^{ハシ}

親幸す早見よ迹かくまんや近う御名の所より懃むべ
歎公吉よ弦くさぶ

宗次郎大雪夜墮中古社

はまちあまよう、星近まみをすして多く金をかゝる事あれ
そぞき事せゆばくぬ家煙めと家事あてももあまようがれみて
いと出づる、我向へまろ事もなうて、かとうよう鶴よ鶴り
川鶴よ鶴り、せとせと遙にうる審盡たるこ鶴よ鶴ちまと
いふお娘若姫と鶴うれはすとあらぐものびせふと
わの半身をわす千夜七つ時うれはむよと門口つまむ
うちひだ坂上直のままであらすじあらすじとほとくとあらすじ
三橋よろづてかの傍太まづ方に尋ねる、謙よ近の處並び
あきあき造酒屋を一筋の大店つてね並うる家並みと
石橋を渡り、もと門を這ふ、自らの酒屋、家株ともに建續
やだのくろ竹熱簾の帳うつて、參不よ五つを難能が事
快活也、あらぐの詫を云ふまること、今ハ半すこの代にて立處をま
うめ、かく清切うわと却て如筆いと金二千兩とて
百日寄うと立ける。つて日暮を支度せしめに第てあまよう半
長を付のものとて持主あるがけて、おのれの毒もあつて、幸い

鞠義より早速うようのあく等、あらげ歸りて身を整ふ
ぬせどやの奥の奥の事は甘えられべにあまきうづ
はまとうとれらす所ドキ事もあん室房の内よけ鞠うづの幸
室うそ七所も高うづがみだざくき麻うきのゆざれ差されば
使あく事ともむづく事一とてあたる早う鞠うづの事今歲
猶老あきよして少體へゆす日までとまどひのゆ一相と
もあく毎日あづらまびや室へばまんも行かづかられ
全所うつらむもすう一度の因いもとまもねまをうる
事す時 五よその室まで朝のぬくはてとてあもうちの氣す
ま甚一見れば室房と案あたるにと今も寝まんわざやの
相ももて客のうづはくはくはくはくはくはくはくはくはく
部一方りまきひ野一ふづば源よちも源くうせきて源よ常て
空を渡ぐとひじゆて育じぬくまおとからく戸をとあむと
ゆきつけ風すさせそ切らうく肩身をぬくぞうく下とも深せ
あらうづくち病の腰高リまはせゆく腰の傍おさと社あつて
体こころやあを抱いての神明今松のうを憐りあつて
仰率け病を救ひせまじきといつう年で又社を出でいそぎうづ
經よもや二病の門前よより田の上の老農うづにあつて
害のちあくをあらひゆよとめよとめよとめよとめよとめよと
杖を突てあらひよ向ひ事道成ぬそ御く鞠うづふ三席

肉よ入て見れば、主食は麺うへ破れうすうる事あらば
薬たまひあらよ腹根ぬきて而上廻倒され一が害だすか
困が害の火も内へ通達に至る車輪車輪物の破
しの車根を傍よ運びのけ一すじく運車改て團扇裏城
擇うらひてやへすうみのあらは後一滅されど宝物と安堵
ナリて盡出られども夜中の繩引う焉いふくゆむる
又火成りまむ(まめ)もあらわれば室度アコシテふせんとらき
き案うらりかの先に傳て右事うり事をおひ事
ゆふみや(ゆふみや)て今宵生のう一咽みびきうな宅
りてあ細のやすと傍よとひとをぎ中筋よあつて窓の
サウスドウカ(サウスドウカ)ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ
タビ付る赤飯(サクシ)カクサケヨ盛て傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
童(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
酒(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
今申説の門(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
懃(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
家(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
又金(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
まかまく(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ
す(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ傳(マダラ)ヒツイヒツイヒツイ

はてよ爲めにあらむ實をばほすに穀うる、歎せやうくか
て東ノ角の布に刻々籍との書す行の綱あらゆとを
却きそ室をさうみの麿うの門に火をもて室をよりよ
四方盃のまくあられら衆をまうにをりて火を放んと母を
改め歩くリ久よ向かす人全の間で二三の者とかけ
来る室考えをみて窓い便に人を引くがりまづし社
主と体を殺され三人揚よ腰あつけの因をうぐひるハ也
計妙をひじや又主を殺してありハ滅よひまでもちが亂れ
がもは行けりとがせをえ迎へてからくはめぬぞや又主へりよ
されは亂じひなまゐゆをかを連れひそめの室今だれ
居りまづれはれよとがせをれどひあんぞよなれても
いかぬ事のうすのちのまへかじや室考えめりよ
所よろりかくうは明びて今まへもあつけませふとて
又三人御道おのをひく事考えをすう因より自考えを考
にまへばほに陸太ま二人、後次根ふとく家の化男うる是公
をも成被ひきもありと感へいふ感ひようひゆうや遠する
工藝人社の門をかく後の敷をときこけやあつ前半の川を
渡しておどらのがり令ふまうに立た室考えのびりく風や
復唱じしきを自ハ谷歌の対のやひへづくかれわ
憂者をあらう行國の山越えと狼を打

聖日七うりよ定のゆをめく道をひきりあわどぶ飯をすれ
て向つて家を今一宿せきにてとすかとすくよ渴うな渴うなの不食
の無むうりまふ家をかの渴渴うなうなと死死うしうして二うりにあらう
あらうへ傍そぞあらへモウあらへなせなせとひらへと
とあらへ生なまりあを家いえを空腹すまへと耳みみのどきとひら
このおもむねよき人の遊まわ弱よわを着きて東ひが見母みはをす
などこのあざう徳とくうへりす病狼まへのわを山さんて足あしすにま
あやすく是これまで家いえより向むかへと誰だ人ひとをまめを通り今いま
ハ狼わ病びをすも里さとへ出でりすわのりのと内うちがうるせり籠くわをかまだ
用もちは伴ともをあともひも落おちと二に人ひと食く殺ごす一いつ身みよモウセ
とすとくの身みを三さん里りから移うつ百ひゃく度どもち立たてまづ行ゆく
とらうて狼わの墨すみとごらうやくもとてお宿しゆくて泊とけらうへやひ
まよとくを安やすておもよへと内うちへかくすまとくらふ自じ代だい
がんぐとくくがすらゆてじく行ゆも泊とけも行ゆも度ど休やす
こよく家いえのいとせんと身みをすまよが病び室しつとくらゆる眼まなこ
の墨すみとく室いえのいとせんと身みをすまよが病び室しつとくらゆる眼まなこ
あよごて旅たびのすくのにいとせんと身みをすまよが病び室しつとくらゆる眼まなこ
ちゆうよすくと松まつ花はなのゆまゆ運うつう引ひて用もちひあらうへりや
ませとくかの大運だいうんをすりれり星ほしくま裏うらひまきとみひえがゆ
まゆまゆあらて追お利りよと公こう算さん二にをびま黒くろを引ひて爲ため

いまきのがるは背もたれやひの家みへうまくあたうひまきとお家
じと病のあるや今まざれておきだらひある世を思ふ事
宿毛人自らもかうかうとおまめぬせゆあらす
もまくよお弟うへかもなまがまほぞうもひと是ちまく
せぬ事ひつていづるの侍はされりうる事立よとんと
はるは星うけ園うち狼立く日中も出る方旅人
は来せ鶴谷を導大野うる通うや事を已年未か堅
はるや方浦若也月日各々年余とあらずぬ二人は是を達
湯屋の事立て事生寒うり逆大よ後悔して櫻のうく
立處うるとあらずもあらわと新て道の程むくわ
あらわとあらずもあらわと新て道の程むくわ
坐毛をすこじきもあらわと新て道の程むくわ
うるをはりと極やかま福富くちを笑ひ十もちの
よきからひがとひのをひまのと狼がゆく露うと
通ひゆ人の事さととみすすみうわよぢがゆ田をすく
豆ひそく豆ひそく山根まうつたりつ生まくわせはうる
がまうくはよと氣にやでゆの園(よちのやまをする奴よ
右肩がちうあひのをおがてく樹木おひゑうるるかに六
八歳くと有つて名をさめとてなら狼王まひとひとひと
名ふ二ふとあまうひおとく其の眼のまゝ後のまくはるふ

樹の金勢ひき國のよしむらう室をうきとうりはど
のすくかまつたが御にちまきて櫻をむるは時をまつたより
西まで奉はれ死ぬ令下かくら根ふ食せとありとやうき
ちがきうとゆみ下家事うどあひておもての前よ進んで
國よよぢのびるはくらあ赤井櫻魂も身に骨にちをうわ
も怖怯するあくまわくかの役のまをこそうだうりあとや
くよゑに根ひきじてそのえよのと遠くうちも
う見ゆてゆくに室を席うめまくとま道をうまくと
ア後をうくらの狼も退ふと寛へゆつて室をあく
生えら公派してからとお息をつかあようはけせよいき
治はれをまつても源氏を理をとんせハ志のりあきあらゆ
玉とも公殿のひろてハ櫻の大盤やのどくと櫻不敵ふ
なう物じかの根もおもとうが儀装する勇氣あらばれん
誠よほすき雅坐のまと奉まら余りもりと舞よ風を
冷すと自らともかくぬ失のゆむたとみとけ奉る余の
あひだまきの先で解き後ともろくと立候う二人は足
尼をたかどあきれもまくとたゆね櫻うけ入道工を
うも山篠べくか連ひあひじとらひて二人公地付
あひけくべきのまよまよあまうつてかの笠大入だといへ

お延のまゝ眼のまゝに見てもとうとうあつて二人ともうなで
たるは御多き物語りてひく處よ二の別院へりとれりやな
なまやとまづひ時事法ちかまくとあたごを寝候との
明月そりづきまたあれはらかの立石ゆり納めび生うそり
入るを深く見ゆて左から御道と向う右の道を
二重余りゆりく簾のまゝ夜もやのくと明けじふ二八
あがよこよまとそひ日も又簾のゆのゆのかれてはるぬ
王子源甲御侍乃と園さんぢうを寄る

朝て二八合ひ谷しげ簾あよ姫かくきて夜の道を走
東海の氣氣りてゆゆ中で歸すてゆりうどおもようてぬ日も春
けりと古湯を立ちてかて山宿の簾廻すて食料りくと
桶木籠の三食食してわくやどよおもすう今ハつれを
一室もりうまで家路もれ難つき空あく猪するの声もあ
かくふやね夜を明くすも是れうく進退寢に極くう
处よ主人のるを頃をうるて來りけ候をとて扇うるあり
傍よどよとく家来而てよよ爲びておもすうとあるのせ
て志の難不キアリと、自もてよある所にわくする士弊
子を追うちれば家路を引ひとく道をひそぐ而よ芦臺の弟
に縛るといふ事のども下皆つまむる人の男八人

あくと常て酒のまわづがのまきをりのあくが
代物を見え氣とねのまにゆき廢だつて家をせせをも
せり是れを而すまぬとくに連れてわざの酒を
のましゆく同ももう腰も立たずよ碎りれ家
筋へあまうが重く一まんす逃がトタリ往か
根がさうと事うりと一つの船はよ邊て日も既よこれ
かれは附二分のり追來まべいとへせんと向き
とあまとまな面ひの船に一船の舟うりテ声をひかて
渡(わたり)くと波打うれ、少ゆうま人の男伴(のひめいん)
のう解せ舟てあるとの事(廿二人を)せせてスのゆく
が草(くさ)繁(しげ)く船を擱(とど)めてサク(くさく)
きじゆとい船(ふね)も乗(の)らずよ能(の)くきりあ
岸(し)へる事(こと)なとてゆきうかうせよ行(ゆき)
男(おとこ)の船(ふね)をみ一隻(いっしゆく)を穿(うが)て船(ふね)
漕(くわう)せんがやうとひよと云(い)かの男(おとこ)の船(ふね)にのづく
星(ほし)をもて(セイ)月(つき)の見るまに金(かな)月(つき)代(よ)
無(む)て(ムツメツ)の身(み)朝(あさ)をゆくはてとゆう下(した)方(ほう)を詔(めい)

おまえのことをかこておまえのことをひきこむもあく様さうの肉こそがゆる
禪院にてそのへ邊のの方のほうへあらすりあらすりあらすりあらすりあらすり
ごとうはせぬといふをあひ立てかの肉さんぢうを西室せし
やくとも食へされよ大ふめびとてせうとくとく永休えみ
あれがよ下のものもあはれとせり立地どもすがわとあらわに
あまうするをかあまうれ安らぎはや高風い肴ませぬやハ
口ほじうちやゆんの方がやまとてすまは強うまれよござり
ますまは強うまれよとらますするふとあらわばは葉
肉やませよとくますとよ下の肴ひりあらわよ財物くわやがよ
あれともや扇をなまるとて則があまうよお肉よおあくられがふた
ふのう殺ちうづ方にひきあひてうのめ、あうてぬじきやうむを
こぶ鶴色うのうにて食もすくははじく上下事ひじくは
見るふだりまくと向ひまこと自嘆今ハマテウモヒツキを
隠やうてゆと見うまうかよ公迷ひ宿よだる宿よかひ宿
ね率全ぐもと急せちむひがひわどまも食ひけ
りひるあくべ通うても連てうすす逆漢よ思ひてすく件下
ちづめの程ひ是直せざりつまくも神公かまくせうすまくは
てすまくかくは家の事まくは院とよを事ひてすくよ役がくよ
あはくすとが城にまくまんの事をよろそくまくが致まくも義
まきまくはれかく彼はうとらればほくのちひくがじてと云ふま

されむすこひかせ落へてうみ夜うらじと宿もすす毎日
病氣づきて毎日通薬あくうりまびやかやまから下病を害
全くかの巻ひとう起りうぶ草を殺めまつましくの宿まを
渡りて今もも及ばずとて再三お令を詰めりまつま紋たうも誠
に氣の毒よおひ出まぬまでも無しに一度八度てえんせん
とお室表紙上とび上下となは後このお細玉ゆうるの室表紙
おひの外納得あくう豊たんごや段な昂いはせずと無れ
にひまとのまあらた室表紙金へ月々金主湯公の儀され
おひの中央大貢下とぞねぢあすうが後おさづくとちりひ
おまようが方につく風方よまよ物つてまとうやうふ成て
正言せゆえりまともあらう、是を変て大よがと説きこまく
被からうがひこのれを猶よせゆうと正言せひ切ひてお
御の体勢うがひを尋ねずとまうよむとおひ
象家をゆうてむすと大方あらすとまうよむとハ尋さ
御の形坐まで肉をよう小粒木あくう牢と十あハ酒代ハ
喰くううかうか(阿)く悦ひの聲氣よむすことと云
云り立だ只もくもくとみぐらう殺ちうかの内、室表紙を
おまんゆうむとおひあんあうひとアキムヒシトシ
ほうハ船乗せうねとちく生ゆうてに社をゆうてのま

後事一宗あらうが内よりまぬまとあてひの下を走
金ノリトヨ家あはくもじもくちきめりまばあまようつひよ
五事よびりう殺かう別のすゑま黒毛牛に腰あが
して腰あうとの事あくやだめひかてれと黒うニ金をさ
みううと黒毛牛をうきよ母よか公の佈と金をうこあ
種ひよく併とて割りく其もすゞふ事なれば殺かう
うのむすとよきひしておあううややのううすう切こうよ
介うふをあようへかくううづよりあれゆくうぶつと而もすゞ
らも殺かうれハ瘡も納つてしもきだんよううるが
け時をあうざ不興あうそてはまきうともわなれまきまわそ
後もあらゆる殺かく頭二刀の刃をもどりあらざるがそれ
あらの黒毛牛をかまう是室を越て解ひ時と途立つべと
男は殺かくもあく一云の初もあくの(モ)もあくがくしふ
岸とがの因よ金を鳴じ轍をあはせ風をわすく雲
波と後おも事うへ口うぐうとさあくと波うむすく是を
尼とあまくもあひゆゆ波うよやと圓をもあらうて波をあ
六ノハコに幸ひえ鳴うとさう雲波の生れあはまく
乳の出来かうかく雲波移くとくの事まきがくさんされ
ほじたあまれども十年このうはまくふせ房を金をう
亭うめかとぬうと西月よか内とおまうんの殺かくぬう

是やどもあらわをあつて山根と合合をれべりひやう
そ幸ひやうモウトヒト生てやう氣がほさまと往々書
さる角く發て眞を擡ぐんぢや外よ戸の間を設九ノ門
ぞゆすはばにまよはゆきむよモウゆすもいだ及
ひぬ見事屋を連て切りきをうて下されませとぞ馴二入を
秀家は傳ひつとぎこち度とさせとゆきせ致九郎高
ちまちゆう風とひお奉りう御のうをばら方を
就きゆうがおもようとすとの故なりまればひひきとゆき
別れうるまに家衆うかごともうじ然事を能ひゆ
後日へ我亦よ立席戸前とよりたゞがちもあまへまへ

さて後九郎腰すゝまへうき切らめがくわうて死苦も
ちのまに益るて争ひうるの有り家業をあがくき其業甚
しきれ半面、半一は度坐敷あせをうりあらひにひう
今朝名高枝させし日坐處やかみの御腹つゝは坐
家業を失、後往却座壇前致款をうと隣もおれだ家業
旋窓とや内と只のこれ家うらうもううううう

うえよもやかうてあらは
猿勝法師大聖山
うそつ御堂を伴ふ

おも家近所の人のうちひかのとすう今ハ西にまちとつよ
身のうちよあくとまと道公^{だいこう}の太郎をかう。行者
傳の中より入大物連^{だいものれん}の天峯^{てんぽう}山^{さん}よりもに家古^この時^{とき}

そよおほのう星あり小嘗ごと家をやれども十余年来る
つゝよ事生解く事あひてかの嚙苦自接五うてあつまると
ゆめあらのゆづりよきこゑくまで城のうふすあらん
我は星を年かよみ病をかねせ一豫務法やうりちの前
雲氣と深きア悪魔摩伏のれ星にむらと云出を
いたへてぎかのれをかき見まへて一通の去状あり

其文言一二語

ざんこく
事の動くものも
うきよのまこと

あいさと元氣をもつておる
まことに、おはな

卷之三

卷之三

卷之三

14

ま
ト
あるが、もとより敵と有て正に生武を仰ぐ自らものあ無
きれん
生れがく眞よ安ぐま去ゆけの有りえ、死風ともいふべき
男のあまへ壯士もトよ六体どぎも眞ませ持て年老お
足追の羅うなの若わいは後ごの汚がれととささざざもる根ねは原はら乃
ひ者ものもあららくゆへりらの姓성を破はして山を藏くらみ氣
ぞくと同ひとを共ともすくと家いえを守ます父ちちのあとあとに
かづく水みずにかづくとも身みをひざひざの體からを奪だつひ
ひづく
丁と我法がほ佛ぶつ坐すひて是これ爲ためか仰あが年としの旅たび人ひとととはゆゆ

あまくすとましとをへうひそそ五歳の眾城
高木の道草にまきぬく妻のふ家久のとてりも雲
むすび見て二を虚空を上て薦の方家川
をまよふ家原をあたのひをすわゆるまちめらゆの
倍也と美しくはうけむぢゆのまの角弓合せうが琴
の國をく余てつづ連通禽の鐘はいとうま頭足山口
の聲もの樂とか城はびと重子ゆとくは是一體の後
走る身自らせ我私及ひ詎まの役事あつてアうん人
何とすり安ひあく双眼よ波よ掛にてさかひふ

卷之三

或曰好色淫逸矣今コレハラカハ淫ラシメス也汝ナニツ教トス也
余曰夫聖人前ニ道ヲ語ハカラス教少人チリ故ニ教モ又術多外
至正、慾テ少人入サル處故ニ聖人光ヲ和ケ塵同ス聖人詩ヲケア
樂シタストキラライテ淫奔汙辱トキテウラヰコト、其アン
キラミテハ是ラ耻テ正ニ歸セヌカ為ナリ人感スルトキニアラス
感シテコク通ス易ノラニ处ナリ今如比朽クダヒヤ校邪ノ草紙トイヘモ
此文ヲ見テ若此義ラ會スルトキ、自省ラニ克ノ助ニライテ
ナラヤ余ガ去處コニ止マリアヘヌタカツテコドバツルニア
ラス松声竹風皆是道道、何處ニカル音モナク香モナシ

謹識

○振路鳥先生戯作目録

南總館梓

寒温一草

全五冊

振路鳥亭主人著

此書、魏晋唐宋元明の小説及び
我朝の紀事本記より載せる愉快な
傳跡を述べ世に珍り奇書とも
實は文章は古雅金玉なり貴人高家
乃尊前より備へき御伽艸席なり

いはてよ醉故傳

宋再編

附いはれ日アレの桜花

如意金時計

一牧稿

元日より大晦日までの
中行月例時計金玉等
極来る財を前方に
かほりて大極

人情箱入温石

小冊

人情の意味をのこす
内人物をもとめの體を
之を手生がむかへるの

宝珠

一牧稿

長者によるうけ合
の書あり

大盤心礎

小冊

書の意味をのこす
内人物をもとめの體を
之を手生がむかへるの

奇談

一

二

草

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

早稻田大学図書館

011488567510